

赤ちゃん和小中高生とのふれあい 交流事業（授業）の重要性

——スタッフとして現場からの声——

寺 田 清 美

1. 問題と目的

わが国においては、少子高齢化・核家族化が進み、育児不安、幼児虐待など深刻さが増してきており、子どもを守り育てる地域の力が弱まっていることや自己肯定感の低い子が増えていることなどの問題が多く、地域全体で子育てをすることの重要性が再認識されている。また、平成15年7月に成立・公布された「次世代育成支援対策推進法」において、国を挙げて推進する重点施策のひとつとして「地域における子育て支援」が掲げられ、全ての地方自治体が具体的な取り組みを実行することが要請されている。厚生労働省は2002年度、赤ちゃんに対する愛着の感情を育むことや中高生たちにとって、この予備体験が、“育児不安”からもたらされやすいといわれる虐待の予防につながることを目的として「赤ちゃん和小中高生とのふれあい事業」のモデル事業を、杉並区・京都市・新潟市・水沢市・高浜市の5都市で始めた。翌年には本事業としてスタートし徐々に広がりが見られてきている。

しかしながら、継続的なかかわりを持たせることの難しさや担当者の転勤により内容が上手く伝達できていない。一部には、“単発イベント的事業展開になりがちである。”などの報告がなされている。

筆者は2002年度のモデル事業、2003年度の本事業に参加し、さらに2004年度小学校や高校で「赤ちゃんとのふれ合い授業」を担当している。

そこで、本研究は、これまでの小中高生と赤ちゃんのふれあい体験をスタッフの立場から検証し、今後、各地で行われる異世代交流事業展開の一助とすることを目的に、本調査を行った。

2. 研究の方法

- 1) モデル事業、本事業にかかわった5都市のスタッフから集計したアンケート結果や感想報告から課題を抽出した。
- 2) 杉並区0保育園・児童館2002年度モデル事業（4回実施）および2003年度本事業（7回実施）内容の考察
- 3) 2003年度・2004年度杉並区M小学校5年生との1年間の授業（各年度7回実施）
2003年度中野区H小学校6年生との3ヶ月間の授業（3回実施）
2004年度北区T高校2年生との1年間の授業（10回実施）
上記の赤ちゃんとのふれ合い授業にかかわったスタッフから集計したアンケート結果や感想報告から課題を抽出明確化した。
- 4) 以上より課題をまとめた上で考察を行い、さらに今後に向けた事業内容等の提案を行った。

3. 研究結果と考察

課題1) 交流事業開始のきっかけ

まず、5都市ともに、最初は、あくまでもモデル事業として取り組み、その結果により、次年度以降の事業化を検討しようということでスタートした。

試行にあたり、まず、スタッフや推進委員がこの事業の趣旨を学び、各自治体として、どのようなねらいをもって実施するか、その検討から始めた。

高浜市は、『何を知らせるかということではなく、赤ちゃんに出会い触れ合うという実体験から「赤ちゃんってかわいいね」「泣いたりぐずったりするけどやっぱりかわいい」…そのように、感じてもらうことができればいいのではないか。』また、杉並区・京都市は、「企画の段階から中高生に参加してもらい、何をしたいのか、希望や目的を明確にして、中高生と赤ちゃんとの継続的関わりを大切に、命の大切さを知らせたい。」など、それぞれの自治体で目的の持ち方の差は多少見られた。しかし、現場スタッフは、この事業の趣旨を踏まえ、子育ての予備体験ができるようサポートしていくことを心がけていたことは、共通意識としてもっていたようである(金田・他2004)。

課題2) 実施体制について

① 参加募集について

中高生の参加募集については、杉並区・高浜市では、学校の授業とは別の形で参加者を募集しようと考えたところもある。それは、すでに、学校の家庭科の授業や総合学習の時間に、中高生が、保育園や幼稚園で、園児との触れ合い活動を実施していたので、このモデル事業では、参加者の自主性・主体性を尊重し実体験から学ぶといったことを大切にしたいためである。

しかし、幾度か事業推進説明のために学校に足を運んでも、教育機関の理解を得ることの難しさが先行し、その結果、中高生の参加が少なく、人集めや場所の確保・推進委員の選出などに翻弄されたスタッフが多かったことも事実である。

中学校にチラシを持ち込み募集したが、参加者はなく、登校時に通学路に立って呼びかけをしたが反応はなく、学童クラブのOBに声をかけたり、パソコンのメールで呼びかけたりして、参加者が徐々に増えていった京都市の例もある。

その一方、犯罪の低年齢化・凶悪化と言った現在の社会状況を考えると、「協力してくれる赤ちゃんがいるのだろうか?」という不安もあったので、協力者の不安を少しでも取り除き安心して協力していただけるように、「中高生たちは、学校を通じて申し込むこと」としたことは共通していた。

このように、参加者の教科履修状況、協力者の心情などに対する配慮などを十分に話し合うことは必須と思われる。アンケート結果をみると、そういった話し合いを怠ると、スタッフの目的や認識の差が歴然としてきて、事業進行の妨げに繋がることなどがうかがえる。実際、参加対象の絞込みの難しさや募集しても集まらないのではないかなどの危惧から、モデル事業を辞退した保育園・児童館もある。

さらに、協力してくれる赤ちゃんについては、一般から募集すると集まらないかもしれないと考えて、児童センターなどで活躍している「母親クラブ」に協力依頼をしたところや、杉並区のように、すでに児童館事業「ゆうきっず(つどいの場)」に参加している親子に声をかけ、参加協力依頼したところもある。また、水沢市のように、すでに以前からの交流関係があり、スムーズにスタートしたところもある。また、新潟市は放課後、学童クラブを活用しての展開を試みた。これら

れをとっても、スタッフが地域の人たちと日常的な関わりが密であればこそ、成しえたものであることは、各館共通の報告にうかがえる。

② 事前学習について

杉並区の0児童館・保育園は、2002年度取り組みの最初の企画段階から、中学生と全スタッフ（児童館保育園職員・保健師・主任児度委員・中学校教員）が話し合うことからスタートした。そして、中高生に対し、乳幼児の発達などの説明も含めた丁寧なオリエンテーションを行ってから、実際に保育園児と継続的に関わり、遊ぶという流れを大切にしながら計4回の交流事業を行った。

2002年度は杉並区立M中学校に出向き、0・1・2歳児の発達と特徴を伝え、ミルク作りなどの事前学習を行い、中学生が主体的に関われるように、何をしたいか企画の段階から参加してもらった後、初めて中学生が保育園に来て遊ぶというように、丁寧に段階を踏むようにして交流を重ねた。

保健士から0歳の発達のレクチャーを受け、保育園の0歳・1歳児クラスの担任から、クラスでかかわる時のポイントなども話し合われた。風邪をひいたり下痢をしたりして感染の恐れのある場合は、赤ちゃんと交流できないことを事前に約束、また、交流前には必ず手を洗うこと、服装は、赤ちゃんの指などがひっかかる危険の少ないトレーナーやTシャツにしようなどといったこまかいポイントもレクチャーした。

交流の時間には、まず、赤ちゃんの泣いている写真を見てもらい、「どうして泣いていると思いますか。」と質問する。こちらの予想通り、最初は「赤ちゃんは、誰もがみな同じように泣くでしょ？」と答える子どもが多い。そういった子どもの反応を前にすると、スタッフは、「中高生には、身近に赤ちゃんと触れ合う機会が本当に少ないのだ」と実感するようだ。

その質問の後、中高校生に「ドリーム人形（首がすわっていない赤ちゃん人形）」を抱いてもらい、赤ちゃんのことを知ってもらおう手がかりとする。人形を使い、赤ちゃんの抱き方やオムツの替え方について話をすると、子どもたちの表情や、赤ちゃんの抱き方がみるみる変わってくる。中には、「オレの小さいときのことを母ちゃんに聞いてみようかな…」と、泣く男の子もいた。

2003年度の小学校での赤ちゃんとのふれあい授業では、赤ちゃんの抱き方をスタッフが丁寧に伝えた後、実際に小学生が自分で赤ちゃんを順番に抱いていった。

赤ちゃんを抱かせてもらう時は、必ず赤ちゃんのお母さんに「抱かせてもらって良いですか？」と、挨拶してから抱かせていただくことをスタッフは伝えている。また、赤ちゃんのその日、その時の状態により、小中高生が抱きたくても抱けないことがあることを、知らせている（資料写真1）。

さらに中学校での事前学習では、保育園職員が中学生にミルク作成体験を一緒に見守る中で取り組んだ。スタッフは、哺乳瓶の乳首を指で触れてはいけないこと、ミルクの薄さは味覚が未発達な乳児にとって大切なステップになること、などを丁寧に伝えていった。

中学生たちはミルクの缶を開ける時から戸惑いを見せ、お湯の温度、粉の混ぜ方など、ひとつひとつが新鮮な体験のようである。話を聞くだけでなく、自らが関わり、体験することにより、興味関心が増し、学習意欲も高まっていったように感じられた。

中学生は実際にミルク粉をなめてみると、「甘い…。」液状のミルクを飲んでみると、

「まずーい・こんなの飲んでいたの？ 私」。と呟き、保育者は、「薄いからね。でもこの薄さが大切なよ。」と答え、スタッフは、子どもたちの生の声を聴き、反応を見ることにより、徐々にこの事業の意義や大切さに気付いていった。

2002年度のモデル事業は、9月中旬からの開始で準備期間が短かったため、中高生と大人との時間調整が難しかったようである。スタッフが、中高生への事業レクチャーの途上で希望を聞くよう努めたとの報告もある。また、一部の地域を除いては、プログラムをスタッフで決めてしまったが、

できれば参加する中高生も推進委員と一緒に事業についての説明を受け、「どんなことがしたいか。」「どのように関わりたいか。」などを直接、聞くことができると良かったという感想を語る地域も多い。

課題3) 子どもの反応について

事業を展開する上で、子どもたちの反応を観察・認識し、次回につないでいくことは、スタッフとして欠かせない作業である。

手法としては、「事前レクチャー」を実施した後、実際に「赤ちゃんに触れ合うひとときを体験」し、その後必ず「振り返りの会」を持ったというところが多い。この振り返りの会では、子どもたちが触れ合った感想を、各自感想文を書くように依頼したところや、アンケート(資料2)を作成しておき、子どもたちが感想を記入しやすくするなど、「振り返り」に対する、スタッフ側の配慮が感じられるところもみられた。

0 保育園児童館はアンケートを使用し必ず毎回振り返りの時間を最低30分くらい持ち、書くこと(感想を記入することで自分自身の気持ちに向き合える)を心がけた。

参加した中高生だけでなく、スタッフも書くようにした。さらに書き終えた後に、参加者全員が一言ずつ感想を述べ合う機会をもうけることを大切にした。そのことで、参加した中高生だけでなく、保育園や児童館・保健センター・主任児童委員などスタッフ全員が自分自身を振り返る機会を得ることができる。中高生・スタッフ共に、言葉に表わすことから、一体感が生まれていくと感じる。杉並区・S主任児童委員はこのように語っている。

「回を重ねるたびに、感想の量が増えて2倍3倍になり、子どもたちの表情も生き生きしてきて変化が感じられて嬉しい。」

ここでは、参加者の様子から次回に、どうつなげていくかを検討したが、このことが、スタッフ同士の大きな学びあいの場になり、姿勢や意識が前向きに変化していったことがアンケート結果から伺われた。

課題4) アンケートの結果

① アンケートからみえるもの

5都市のアンケート結果から、参加後の方が、事業に対して肯定的になり、今後も取り組むことが望ましいという意識が生まれているといえる。また、意識の変化として、最初は初めての参加者もいて、どのように関わってよいか解らないが、次第にこの事業の目的や意義を理解し協力的な意識が高まってきている様子が、アンケートの記述文章の中から伺える(金田・他2004)。

・クロス集計結果からは、プログラムの参加後はすべての対象において(赤ちゃん・中高生・スタッフ・親)相互理解が読み取れる。とりわけ1回だけのプログラム参加であっても参加した小中高生の赤ちゃん理解は、抱っこ・遊ぶなどの場を通して増加していることが明らかになった。保育所・幼稚園の見学、家庭科の授業は学習効果として高い比率が示されている。プログラム参加者が、自分自身の養育過程における状況(日常性)に関心を示すこと、家庭内の会話に「赤ちゃん」が登場することが増加した。このような状況をスタッフは見・聞き・感じるにより、この事業をより意義のある肯定的な内容と、捉えていることが伺われる。

5都市のアンケートの自由記述には、

- もっと中高校生のことを母親たちに知って欲しいと思った。
- この事業に対してどの程度理解して参加してもらえているか心配だったし、事故がおきないように何を伝えたらよいか考えました。
- 受け入れは大変でいちいち注意したり、指導するのは疲れると思うこともあるが、少しでも解ってほしいので私の考えを話している。
- 早い時期から体験させることが必要であると感じた。
- 必要性を参加した母親や、中高生の保護者にも伝えていくことが大切だが、子どもが家庭で話していないことが予想される。話していなければ、主催者が保護者に伝えていく必要がある。以上が述べられている。

一方、「赤ちゃんとのふれ合い授業」に参加したスタッフのアンケートには、

- 赤ちゃんに対するやさしいまなざしや手作りおもちゃを工夫する情熱には心が打たれました。
- 高校生の普段見ることのない無防備な笑顔を見ることができました。
- この事業に参加する前は、高校生に対して、もう大きいからと自分から距離をおいていたが参加後は、高校生に対して、本来持っていた小さい子と関わる力が開花し自信と力をつけてほしく感じると変化した。
- 毎回全員が、もくもくと用紙一杯に記入してくれ、ビックリさせられました。それだけ感動したということだと思っております。また、絵本の読み聞かせをしたところ、初めは照れくさそうだったが、皆、途中から真剣に聞き入っており、自分で読むだけでなく小学高学年になってからの、読み聞かせ体験もすばらしいことだと改めて感じた。以上が述べられている。

このように、5都市のアンケート結果からは、指導育成の姿勢が高くなってきている傾向があるように伺える記述内容がある。あくまでも主体は赤ちゃん和小中高生の参加者であり、スタッフは、赤ちゃんと中高生の参加者両者の気持ちを上手く伝えられるようコーディネートしていくことが優先されることが望ましいといえるのではない。

② 感想から見えてくること

今回の事業報告から、中高生や赤ちゃん協力者そして職員も、それぞれがこうした場所や環境を求めていたことや同じ児童・生徒が同じ乳幼児と継続的にかかわることで相乗効果がみられ(寺田2004-A)、継続性が大切であることや思いやりの気持ちが育まれることが、実際の声や感想文(資料3)から明らかになった。赤ちゃんに触れあった瞬間、参加者の表情が皆柔らかく変化していったことも事実である。

例えば、180センチもある男子高校生の姿が印象的で、事前レクチャーでは、とても硬い表情で、推進委員も「どう声をかけてよいかわからなかった。」といていた子が、赤ちゃんに出会った瞬間笑顔に変化し、交流中は、嬉しそうな表情に変化していったという報告がある。

中学1年生男子A君(13)は、一人っ子で塾通いをしており、小さな子供に関心を持つチャンスさえなく、保育園に来たときは「先生や同級生が行くというから」、一度だけの付き合いのつもりで来園した。しかし、この交流体験を通して、偶然に目が会った時の、にっこり笑った赤ちゃんの笑顔に魅せられて、それ以降、自ら交流内容を企画する係を申し出るなど、活き活きとした表情に変わってきている。その他の中高生の姿を見ても、保育現場や地域活動の場で、赤ちゃんと幼児、小、中、高校生とのふれあい活動が、中高生たちに柔らかい変化をもたらしてくれることを強く感じている(寺田2004-B)。

成長過程に気付いた小中高生や、自らを振り返り、母親を理解しようとした中高生もいる。全体的には、赤ちゃんにじかに触れて更にかわいさが膨らむ中、逆に大変さにも気付き、驚きや困惑、自分自身の未来像なども出てきて、赤ちゃんに対する興味・関心から、「もっと赤ちゃんに触れ合いたい。」そして「赤ちゃんについて、もっと知りたい。」といった気持ちが膨らんでいったようである。

また、当初は、中高生のための事業として実施していたが、実際の様子を見ていると、協力してくれる赤ちゃんの母親にとっても効果的な事業であったと感じる。お母さんやお父さんが、自分の育児を振り返り、中高生に対して自分に言い聞かせるように語ることは、同時に、自分の苦労話を真剣に聞いてくれる中高生に心を癒され、日頃のストレス解消にもなっているように感じる。また当初は、中高生のための事業として実施していたが、実際に小学5年生や6年生の授業を担当してみて「自分が父親になったら奥さんと協力して子どもを育てたい。」「おむつの替え方を知って役に立つと思った。」「妊婦さんを見たら荷物持つか電車で席を譲るとかした方がいいと思った。」等の具体的な感想を持つ男児が多いことが解った。また女兒は「言葉がしゃべれないから泣くんだね、泣くことも大切なだね。」「おっぱいを飲んでいる時のあかちゃんの顔が可愛らしかった。」などのどちらかといえば情緒面の変化が感じられるような感想を話していた。質問は「あかちゃんは何処から生まれるの?」「這い這いはいつから?」「夜中はどの位寝るの? お母さんはいつ寝るの?」「離乳食は何食べるの?」他、沢山のことに興味関心を持ち「僕も赤ちゃんだったんよね。」と、自分を振り返る姿や「お母さんは大変なんだね」などの思いやりの気持ちが芽生えてる姿からも本事業は中高生だけでなく小学校高学年から対象とすることが望ましいといえるのではないかと。

4. 今後の課題

① 子育てサポーターやファシリテーターの育成

今後は、行政の事業としてではなく、いつでも、自由に出会い触れ合いの持てる地域の居場所づくりに結び付けていくことが大切である。地域で活躍する子育てサポーターやボランティアの方々が中心になって進めていけるように子育て支援NPOや子育てネットワークが主体的に取り組む事業にすることで、親の意識のさらなる向上、子育て支援ネットワークの広がりが生まれるのではないだろうか。そのためにも、いかなる団体、ネットワークが行っても安心できる、最低限の質の確保が必要であろう。

また指導的立場（ファシリテーター）の育成も必要である。この事業や授業はファシリテーターが丁寧に説明し、予習復習作業をしていくことにより、効果があがることは前述してきた通りである。指導的立場に関わる者がいない、あるいは、行政内の異動などに伴い担当者がいなくなると、その児童館や保育園では継続しないことになりかねない。

② プログラムの提案

継続して1年間にわたる小学5年生の授業（2回）を実践した中から以下のようなプログラムと配慮点を提案する。

プログラム例

タイトル	月 齢	学 習 内 容
1 事前学習		<ul style="list-style-type: none"> • あかちゃんのイメージを出し合う。 • 子ども達が何をしたいのか意見を出し合う。
2 事前学習		<ul style="list-style-type: none"> • 泣くことの意味を知る、ひとりひとり感情の違いを知る、乳児の発達を学ぶ。 • 教室を全員で清掃するなどあかちゃんが来る準備を確認する。 • 人形を使い実習（抱っこ・おしめ替え）
3 はじめましてあかちゃん	2～4ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> • この月齢に合った玩具を知る。 *お母さんからあかちゃんの様子を聞く。（身長・体重・言葉・運動・食事） *これらは毎回聞く。 • お母さんがおっぱいやミルクをあげている姿やおしめ替えの様子を見る。
4 あかちゃんを知ろう	6～7ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> • ハイハイの様子や離乳食を食べる様子を見る。
5 あかちゃんとあそぼう	8～9ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> • 乳児の感情や「人見知り」の学習・あやし遊びふれ合い遊びを試してみる。
6 あかちゃんの冒険	10～11ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> • 外気浴・散歩・指さしの意味を知る。
7 自分を振り返る		<ul style="list-style-type: none"> • 自分が1歳の時を知る。 • 自分が1歳の時の写真を見る・家族から当時の話を聞き自分の1歳時ノートを作成する。
8 お誕生日おめでとう	1歳	<ul style="list-style-type: none"> • あかちゃんの1歳のお誕生を祝う。 • この授業の10ヶ月を振り返り成長を知る。 • あかちゃんのお母さんの話を聞く。
*番外編		<ul style="list-style-type: none"> • あかちゃんは当日の朝発熱するなど行動予測がつかない。その時のために、このようなワークショップを用意しておく事を勧める。 *粉ミルクと液状ミルクの違いを知る実習 *絵カードを利用して離乳食の初期・中期・後期の違いを知る。 *おんぶや抱っこ紐を使い人形で実習してみる。 *月齢に合ったおもちゃの遊び方や絵本の読み方を学習する。

赤ちゃんプログラムを実施する中で大切にしてきたことをまとめた。

継続性の大切さ

同じ子（小・中・高校生）が保育園や児童館で同じ乳幼児とかかわる事が大切である。または、教室にあかちゃんに来て頂き、約1年間、関わり、乳幼児の育ちが感じられる体験が出来るようにプログラムを企画する事が望ましい。

事前学習の重要性

事前学習を十分に行い、保健士や保育士から乳幼児の発達を学ぶ機会を作る。

赤ちゃんをゆさぶってはいけないこと・人形を使い抱き方、おしめ替えの練習をする。

衛生面・服装・接し方の留意など（赤ちゃんが主体である事・抱きたくても抱けない事がある等及び風邪・下痢など体調不良の日は乳幼児に接する事は出来ない・爪・髪・などへの留意）

企画に小中高校生の意見を組み入れる

参加する子ども達に「何をしたいか」を聞きだし、子どもが主体的に関われるように事前学習の中に盛り込むことが大切である。

赤ちゃんの記録ノートの記入

あかちゃんの成長の変化を知るために、子ども達は、毎回赤ちゃんの様子を記入していく必要がある。

振り返りの時間を設定する

終了後、振り返りの時間を最低30分位は確保する。

書くという行為の大切さ（感想を記入することで自分自身の気持ちに向き合える。）がある。

更に書き終えたあとに参加者全員から、ひとこと感想を話す機会を作る。このことが、小中高校生だけでなく、保育園や児童館・学校関係者・保健師・主任児童委員など全員が自分自身をふりかえり、言葉に表わすことから、一体感が生まれる。

その他の配慮

担当責任者は赤ちゃんのお母さんに、この活動の目的と意義を話し理解頂くようにする。

赤ちゃんプログラムに適した場所を選ぶこと、（体育館等広すぎる場所は適さない）赤ちゃんの発達に応じておもちゃ・絵本を選択する事も大切である。

5. 終わりに

赤ちゃんと出会い、ふれあい、そして関わることによって私たちは赤ちゃんの持つパワーを感じることができる。それは他者への関心や共感の能力を高め、思いやりの心や命を大切に作る心の育ちへとつながっていく。

事業活動を続けるうちに、赤ちゃんの「育つ力」が母親の「育てる力」を引き出し、母親の「育てる力」が赤ちゃんの「育つ力」を引き出すという、相乗的相互作用が生まれることに気付いてきた。さらに実際の現場では、四六時中皆さん笑顔になってしまうという不思議さを実感した。「準備が大変だったけれど、楽しいのでまたやりたくなってしまう。」、これが本音である。

この事業や授業は、地域の方々の協力なしには、実施が困難である、地域を結ぶ中心が、赤ちゃんであり、赤ちゃんが、地域をつなぐと言っても過言ではないようである。

参加した誰もが本当に気持ちが落ち着き心温まる。赤ちゃんを通して地域が育っていけそうだと実感した。小中高生などの参加者にとっても、赤ちゃんの協力者にとっても、そして、担当者にとっても、実り豊かな事業(授業)なのではないだろうか。

中嶋・砂上・他（2004）は高校家庭科の保育体験学習者に対して64.5%は日常生活の中で乳幼児と触れ合う機会がほとんどないことや乳幼児に対する意識の変化は体験することにより、好意的な生徒は50.9%から69.1%へと19.1%高くなり、また、非好意的な生徒は49.1%から30.9%と低くなっていること等の報告をしている。体験学習の生徒でもこのような意識変容が見られるわけである。継続してかかわることの大切さを前述してきたが、今後は、小学生や高校生が授業を1年間継続していく中で乳幼児に対する意識がどのように変化していくのか、意識変容の面からも研究を進めて

いく。

次世代育成支援とは、生まれ育った地域でお互いの存在を感じ支えあうことが大切だと感じる。これからも命の大切さや思いやりの心が育みあえるような、ふれ合い交流を重ねていきたい。

資料写真 1

2003年度H小学校での赤ちゃんとのふれあいの様子である。赤ちゃんの抱き方をスタッフが丁寧に伝えた後、小学生が自分で赤ちゃんを抱いているところである。↓



「赤ちゃんと出会い・ふれあいプログラム」アンケート

名 前

赤ちゃんプログラムに参加されていかがでしたか？今のお気持ちを聞かせてください。

今日は、どんなことをしましたか 該当するものに、○をつけてください。

- ① 抱っこした ② あそんだ ③おもちゃをつかった ④お世話をした ⑤ 説明をした
⑥ その他 ()

1. その時は、どんなことを感じましたか？

[]

2. 子ども達の「赤ちゃん」というイメージは、最初と変わりましたか？

[]

3. 今日のお母さんの話で、印象に残ったことは何ですか？

[]

4. 保育園の体験はいかがでしたか？

5. 今日の児童館での体験はいかがでしたか？

6. 今回のプロジェクトメンバーとして参加していかがでしたか？

7. その他 感じたことを ご記入ください。



ご協力ありがとうございます

(杉並・0 保育園児童館アンケート 引用・作成寺田清美)

資料 3

職員の感想

継続性を大切にしたい

大宮児童館 鈴木良東

ある中学生が、昨年交流した赤ちゃんの成長に驚き「たくさんおしゃべりもしてビックリ、こんなに早く大きくなるのか。」と素直な感想を述べてくれた。「赤ちゃんが覚えていてくれて、抱きついてきてくれた。」「こんどは〇〇ちゃんにおもちゃを作ってあげたい。」との感想は、数日間同じ赤ちゃんと交流を続けてきた小学生の声である。

大宮保育園と大宮児童館の赤ちゃんとの触れ合い事業の特徴は、「同じ子どもが同じ赤ちゃんと継続して関わる」ところにある。それは継続して関わることによって、①発達など赤ちゃんを系統的に理解できること、②赤ちゃんに対する愛着の形成が深まること、③そして愛着形成の深まりが事業に対する積極性を生み出すこと、などより効果的であると考えからである。

この事業は、子ども達が自ら進んで赤ちゃん和交流しようとする気持ちによって成り立つ。そしてその気持ちは、赤ちゃんに対する愛着を深めることによるのであり、そのためには同じ赤ちゃんとの継続した触れ合いが欠かせないと考える。なぜなら初めて会った赤ちゃんよりも、継続して関わり、交流を深めた赤ちゃんの方が愛着は湧くと思えるからである。そして愛着があるからこそ「赤ちゃんのことをもっと知りたい。」という期待感や「赤ちゃんを喜ばせてあげたい。」という思いやりの気持ちが生まれるのであり、さらに、そのことは事業に対する積極的な態度・行動として表われる。

最後に、継続するからこそ、母親の育児体験を聞く、様々な実習（ミルクをつくる、おしめを替える）等、多面的な活動ができることも付け加えておく。

地域ぐるみの子育てを支えること

H14年担当 大宮児童館 副島雅代

大宮児童館では併設されている大宮保育園と共催で、H14年11月から12月にかけて年長児童と赤ちゃんのふれあい事業として中学生を対象とした「はじめまして赤ちゃん」を実施した。年度途中の呼びかけにもかかわらず、中学校・保健センター・主任児童委員・地域に住む子育て中の母親が、協力・参加してくれた。中学生と赤ちゃんという異世代のふれあいはもちろん有意義なものだったが、事業実施を通して関係機関や地域が交流し互いの理解と協力関係を深めることができた。杉並区では、地域ぐるみの子育てを支えることを目的に平成11年から地域子育てネットワーク作りに取り組んでいるが、そのひとつの成果を感じると共にその意義を再認識した。

年長児童と赤ちゃんのふれあい事業の感想

杉並区児童青少年センター 横関恭孝

〇赤ちゃんに出会った中学生・高校生は、様々なことを感じたり考えたりします。「かわいい。」「楽しかった。」「お母さんの大変さがわかった。」といった感想に混じって、「こんなに小さくてもひとりひとり性格があってびっくり！ひとりひとりがちがう。」「とてもよかったです。自分の可能性を広げることができました。」「人間ってすごいと思い、また女性の強さを感じました。」「何かと手がかかるからこそ、かわいいのだなーとを感じるのかと思いました。」といった感想も寄

せられました。赤ちゃんとの出会いを通じて、人間という存在や自分自身を見つめ直したのではないかと思います。そういった、深みのある取り組みとして、より効果的な手法を確立していく必要を感じます。

- 「赤ちゃんに出会った中学生・高校生」に出会った、その赤ちゃんのお母さんの感想が印象的でした。我が子をかわいがってもらえるのは当然うれしいことですが、それ以上に、実際の中学生・高校生にふれることで、自分自身の子育てに希望が持てたという感想が何人もの方から寄せられました。中学生・高校生へのメッセージを語ってもらったケースもありましたが、自身の子育てをふりかえる機会ともなったのではないかと思います。
- 赤ちゃんにとってはどうだったのでしょうか。1歳を越えた少し大きい子たちにとっては楽しい機会になったようです。0歳の子たちのことを考えると、あまり強い刺激にならないような配慮が必要だと思いますが、適切な配慮のもとで、やさしい気持ちを持った中学生・高校生に囲まれることは問題ないことだと思います。

引用・参考文献

- 金田利子・伊志嶺美津子・大村千恵・高橋眞子・田島昌子・寺田清美・櫃田紋子 2004 『年長児童と乳幼児の交流における相互発達と保護者および地域における影響についての調査研究』 子ども未来財団
- 武田信子 2003 『厚生労働省 年長児童の赤ちゃんふれあい交流事業の意義と課題』 武蔵大学紀要論文
- 寺田清美 2004-A 『保育者と中高生との読み聞かせと子どもの反応の違い一次世代育成事業及び職場体験場面からの考察一』 日本保育学会第57回大会論文集 p315～p316
- 寺田清美 2004-B 『赤ちゃんと幼児～高校生のふれあい活動 一出会いふれあいかかわりあいの中でこそ、育つ心がある一』 こども未来2004年2月号 p12～p13
- 中嶋明子・砂上史子・日景弥生・盛 玲子 2004 『高校家庭科における保育体験者の意識変容』 日本家庭科教育学会誌 第46巻 第4号